

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391000017		
法人名	有限会社 草佳苑		
事業所名	グループホーム 大平		
所在地	熊本県菊池市大平597番1		
自己評価作成日	平成 24年 1月 5日	評価結果市町村受理日	平成24年2月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205号		
訪問調査日	平成24年1月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>愛、尊敬、感謝の基本理念とし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者一人ひとりの表情、行動、状態を把握し、明るく安心した生活支援。 ・ボランティアの来訪、家族、近隣住民、子供とのほのぼのとした交流。 ・運営推進会議で全てを報告すると共に職員会議内容をまとめ全て報告・添付する。 ・地域(地区)の消防訓練に参加でき、消防団との交流も少しずつ出来ている。これを安定した基盤作りに。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>21年に開設されたホームでは、日々傾聴や寄り添いのケアに取組み、入居者同士の会話・子どもたちやボランティアとの交流等地域資源を活かしながら、日々の生活に張り合いを持たせている。自然体で地域住民と交流したいとの思いの実現に向けた姿勢は、地域住民の行事参加等として大きな成果となり、地域の活性化にもつなげている。職員は現状に満足することなく、職員アンケートによりケアを振り返り、お茶係りとしての役割のある生活が穏やかな表情を引き出し、立位訓練への取組みがトイレでの排泄に繋げるなどケア力を発揮している。職員は新管理者を盛り立て、業務分担としながらも職員同士意思疎通も良く、入居者同士も馴染み合い、既往歴も安定し、和やかに過ごされている。運営推進会議が相乗効果となり、地域の中での生活基盤も充実してきており、同敷地内には小規模多機能ホーム開設に向け準備中であり、地域高齢者福祉への寄与が益々期待されるホームである。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月の職員定例会議において理念の共有及び地域とのつながりを大切に生活支援の確認を行い実践につなげている。	“愛・尊敬・感謝”をもとに、“笑顔あるその人らしい生活・自立に向けた生活・地域とのつながりを大切に生活の支援”と具体的に掲げ、定例会議の中で振り返り、管理者は事例を通じて指導している。代表は掲示した理念を見るだけでなく、声に出して読むことがその日のスタートであり、意識を持ってケアに当たるよう訓示している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	毎週日曜日、地域よりアニマルセラピーであったり回覧板や散歩、買い物等で地域の方、知人、ご家族が頻繁に来訪があり交流している。	自然体で地域住民と交流したいとの思いの実現に向けた姿勢は、運営推進会議委員率先によるホーム行事に多くの地域住民が参加される等成果が表れている。納涼祭には近隣住民・消防団・家族等の参加や子ども会との餅つきは新聞にも掲載されるほどの盛況であったようである。また、老人会や民生委員を通じて地区の独居の方に餅を配布したり、地区の防災訓練や忘年会参加等地域の一員として活動している。毎週犬と訪問される近隣住民や傾聴ボランティアとの交流や買い物時の歓談、子どもの遊び場としての開放等地域の中での生活は拡充している。	地域住民の協力支援は入居者が住民と接する機会や心身の活性化にもつながり、笑顔のある生活になっていることが掲示された写真により確認できた。多くの地域住民の訪問もあり、今後も地域の一員としての役割を見出し、更なる交流を深められることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症ケアの専門性、実践力を活かして認知症アドバイザーの養成講座の実習生の受け入れも積極的に行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	前回の運営推進会議で取り上げられた検討事項や勤案事項について、その経過を報告し地域との交流に活かしている。	2ヶ月毎に開催される運営推進会議は、現状・活動報告、ヒヤリハットや苦情等報告されており、透明性のある運営体制であることが議事録より確認できた。地域との交流や防災対策等参加者との話し合い場等として活かされ、外部評価結果報告等も行われている。委員からの提案事項は全職員で話し合い、次回の会議で報告する等委員との話し合いをサービス向上に反映させている。また、職員も記録の仕方も勉強の一つであるとして輪番で参加し、全員へ回覧し共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターが行っている認知症アドバイザー養成講座の実習生の受け入れも積極的に行い、協力関係に取り組んでいる。	認知症アドバイザー養成講座の実習生受入れ継続や、運営推進会議参加時には適切なアドバイスを得ている。また、福祉課からの見学研修や認定調査時に意見交換を行う等連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	権利擁護や身体拘束に関する研修を外部でも受け、事業所内でも勉強会を実施し職員の共有認識を図っている又、事例検討等も勉強に取り入れている。	身体拘束や虐待防止等外部研修やホームでの勉強会により認識を深め、事例検討の他、職員に日常のケアを通じて拘束に当たるものはないか事例を通したアンケートを行っている。家族の了解を得て、転倒防止に夜間帯にセンサーマットを使用している。	身体拘束をしないホームとしての理念や方針を掲げることを検討し、職員への意識付けの一つとしていただきたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者は県の研修に参加、事業所内で勉強会を行い(身体的虐待、心理的虐待、必要なケアの放棄等)高齢者虐待防止法に関する取り組みを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する勉強会は行ったが、青年後見制度が必要なケースでは、管理者が対応を考えているため他の職員は支援できる体制が万全とはいえない		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけ丁寧に説明している。利用料金、起こり得るリスク、重度化や看取りについての対応方針、医療連携、ケアに関する考えや取り組みを詳しく説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族には毎月報告書を提出し来訪時とか運営推進会議等で気軽に質問できる雰囲気、意見、要望は勉強会やミーティングで話し合い反映させている。	職員は入居者とのコミュニケーションを図り、要望等を引き出している。毎月担当職員による報告書の送付は家族との情報共有化の他、家族との信頼関係や協力支援に繋げている。また、訪問時や運営推進会議を問題提起の場として活かされ、出された苦情等は日誌に記載し全員で対応策を検討し、家族へ説明している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は職員の要望や意見を聞くように心がけている。職員会議でも気軽に意見、要望が出るよう反映させている。	代表者参加のもと行なう毎月の職員会議は会議の仕方を検討し、事前に課題を提示することに変更し、意見交換を行っている。職員は、連絡帳を介して情報を共有し、問題発生にはその都度話し合い、管理者は日常的にケアに入り職員とのコミュニケーションを図り、職員の悩み等の個別相談に応じている。また、ホームでは報・連・相の徹底に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も頻繁に現場に来て利用者や過ごしたり、個別職員の業務や悩みの相談に当たったりし職員が向上心を持って働けるよう配慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業者外で開催される研修にはなるべく多くの職員が受講できるようにし、職員の段階に応じて計画、それらの研修報告は必ず、報告書を提出し全職員が閲覧しサインしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他のグループホームや事業所との交流を通じて一緒に学んだり親睦を深めたりしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の相談時はなるべくご家族本人と一緒に来訪され、事業所の見学とか内覧していただき、生活、心身の状態や利用家族の思いを受け止め安心してもらえるような関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでのご家族の苦労やサービス状況などの経緯について聞くようにしている 又、ご家族が求めているものを理解しできる限りの対応に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、本人やご家族の思い、状況等を確認し、改善に向けた支援の提案、場合によっては他の事業所のサービスに繋げるなどの対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者は人生の先輩であるという考えが代表者を筆頭に全職員が共有しており普段より利用者に教えてもらう場合もある。事業所の理念に掲げている愛・尊敬・感謝を基本に関係性を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員はご家族の思いに寄り添いながら日々の暮らしの出来事や気付きの情報共有に努め、本人と一緒に支えるためにご家族と職員が連携を取り支援に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人が地域や地域住民との関係ができるよう継続的な自宅帰りでの交流の働きかけをしている。	毎月1回自宅へ帰る入居者、仏壇参りや墓参、鬼子母神参り、生活歴に応じ職員との外食、正月の帰省等家族の協力を得ながら、これまで大切にしてきた関係性の継続に取り組んでいる。地域の行事や祭り見学での地域住民との交流や自宅周辺のドライブ等スケジュールを立て支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性にすべての職員が共有できるようにしている。また、心身の状態や気分、感情で日々変化することもあり注意深く見守るようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に帰られてもこれまでの暮らしの継続性が損なわれないように、生活環境支援の内容等の情報を提供し連携に心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の生活の中での関わりで、言葉や表情等からその真意を推察し、確認したり意思疎通が困難な方には、ご家族や関係者より情報を得ることもある。	職員は日々傾聴や寄り添いのケア、声かけ等に徹し、関心を持って個々に関わり、表情や行動の裏に隠れている思いを察知し、意思疎通・発語困難な方には選択肢を投げかけ、難聴の方には顔を見て会話することを徹底し、家族やキーパーソンから情報を得ながら、本人本位になるよう検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族に本人の暮らしぶりとか生活歴等の情報を伝えていただいたり、利用者の過去の暮らしぶりをひもどくことで解決につなげている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活リズムを把握し行動や動作等から感じ取り記録するように心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人やご家族には日頃の関わりの中での思いや意見を聞き反映させるようにしている。アセスメント、全体会議や担当者会議でモニタリング、ケースカンファレンスを行っている。	本人・家族の意向を把握し、毎月のケースカンファレンスや半年毎のモニタリング等に全職員が関わっている。介護度の変更や退院時等私の姿と気持ちシートとADLを見直し、現状に即した具体的なプランを作成している。車椅子から自立に向けた支援等詳細かつ個別的なプランであり、家族も担当者会議へ参加されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	勤務開始前に職員間で申し送りを徹底し、職員の気づきや利用者の状態変化は個々の記録へ、個別ファイル(食事、水分量)身体的状況等、職員全員で共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人や、ご家族の状況に応じて自宅方面へのドライブしたり衣類の買い物支援等、柔軟に対応し個々の満足を高めるよう努力している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域生活を継続、拡大していくため子供会、地域の区長、民生児童委員、老人会長、消防団、ボランティアの皆様と構成される人的ネットワークの構築に向けて協働している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医の他、利用者のかかりつけ医での医療を受けられるよう基本的には家族同行の受診となっているが、不可能な時は職員が代行するようにしている。	もともとかかりつけ医の継続や協力医療機関で家族での受診を基本としているが、家族の諸事情により職員が代行している。また、日頃の情報を発信しスムーズな受診に繋げている。又、訪問歯科による口腔ケア指導もあり嚥下体操の効果も表れてきている。バイタルチェックで健康管理を行い、家族への毎月の報告書に看護師が医療面の記載をするなど、情報共有を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置し、体調や状態の変化を見逃さず早期発見に取組ただちに看護職に報告し適切な医療に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院の際は、本人への支援方法に関する情報を医療機関と共有し4～5日に1回は職員が見舞うようにし、また家族との情報交換や相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人やご家族の意向を踏まえ、事業所が対応しうる支援方法をチームで話し合い説明を行っている。	契約時に重度化対応指針を基に説明を行い、医療中心となった場合は医療機関との連携を取る事を運営推進会議でも説明している。入院の都度家族に繰り返し説明したり、医師の意見書をもとに話し合い、ホームでできる最大限の支援を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを整備し、救急車が到着するまでの応急処置や準備すべきことについて勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力を経て、避難訓練、避難経路の確認、消火器の使い方等の訓練を定期的に行っている。また地域での防災訓練にも参加することができ、消防団へ事業所を内覧していただき各コーナーの説明し協力体制を築いている。	消防署立会いの総合訓練を年2回実施し、毎月第一火曜日には自主訓練を行っている。又、地域の防災訓練への参加や、地震対策の会議で避難マップや緊急連絡体制の確認を行い、備蓄するなど危機意識を持って取り組んでいる。	消防団へホーム内の構造を確認して貰ったり、隣人への協力を依頼されている。今後も消防団に訓練への参加を依頼し、近隣住民と一体となった訓練を実施されることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の性格を尊重し誇りやプライドを損ねるような言葉かけをしないことの徹底、常に本人の意見を尊重してさりげない言葉かけや対応をしている。	入居者一人ひとりと向き合う事で性格や個性を把握し、プライドを損ねない対応に努めている。声かけの仕方や声のトーンへに配慮し、排泄時の誘導方法等事例を通して話し合い、代表も尊厳・尊重について指導している。個人情報保護に取り組み、書類保管や守秘義務の徹底に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりの状態に合わせ、本人が答えやすく選びやすいような働きかけをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを把握し、その人に合った支援を全体会議とかケースカンファレンスに於いて職員全体で介護の統一を図っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時の整容とか靴、食べこぼし、爪等、さりげなく援助しマニキュア、口紅等で楽しんでもらえるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご利用者が食べたいと希望される献立とし季節の野菜、新鮮な魚肉等も考えながら決めるようにしている。職員と利用者が同じテーブルを囲み楽しく食事できるような雰囲気づくりをしている。	入居者の希望を優先した献立を立て、入居者は皮むき等座位でできる事を手伝ったり、お茶担当として活躍される方もある。入居者の嚥下状態に合わせた形態や相性に考慮したテーブル配置を行い、入居者と職員は会話を弾ませる等家庭的な雰囲気での食事である。家族との外食や行事の際の仕出し弁当等も採り入れている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日を通じて栄養のバランス、食事摂取量、飲水量の程度等、職員全体が常に意識し特別に水分量チェックを必要とする人には一日の飲水量を記入し全員で把握している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科医院の訪問診療、口腔ケアあり、事業所としては毎食後の口腔ケア、口腔の疾病予防、義歯の改善、咀嚼、摂食等利用者のQOLを目指し口腔、嚥下体操を毎日行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、尿意のない利用者にも時間おを見計らってさりげなく声かけ誘導しトイレでの排泄ができるよう支援している。	排泄チェックによりパターンを把握し、時間毎やしぐさを確認し声かけや誘導で日中はトイレでの排泄を支援している。昼夜の下着やパットの使い分けで失敗を減らし、下肢筋力低下防止に立位訓練への取組みがトイレでの排泄を可能としている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表を使用し、便秘ぎみの方には牛乳やお茶で十分に水分補給を促したり、おやつとか調理にも繊維質の多い食材を提供し支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの体調やタイミングに合わせてさりげない声かけ、安心して楽しい入浴ができるよう支援している。	個々の体調や希望に合わせて一日置きに支援し、汚染時にはその都度対応している。入居者も着替えや風呂用品を更衣室に置くなど個別に準備し、入浴拒否時には浴室横のトイレを利用した際に入浴を声かけしたり、足浴で対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活リズムに合わせてその日に体調、行動、また夜勤帯の行動などから本人の行動を優先しつつ安心して休息ができるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方や容量が変更されたり本人の状態変化が見られるときは記録に残し看護職員や医療機関との連携を図り利用者の薬の処方、効能等を全職員へ徹底している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの個性を發揮してもらえるようお願いしできらるであろうと思われるような仕事をさりげなく頼み感謝の言葉を伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの個性に合わせて自宅帰りで近所の顔馴染みの人との会話支援とか、四季を感じていただけるような戸外のドライブ等、又ご家族利用者との相談の上での外食、買い物支援をしている。	日常的な庭での外気浴や周辺の散歩、行事担当者が計画した季節の花見や神社参拝など、できる限り入居者が一緒に出かけられるようにボランティアの協力を得たり、さくらの花見では家族との自由な時間を作っている。家族にお願いし自宅へ帰られる方や買い物・外食など支援している。	ホームでは平均年齢84.5歳、介護度3.3という中で、加齢に伴う日常生活の低下や病気の進行なども見られる中で外出を支援していることを大いに評価したい。年々介護度が高くなる現状を踏まえ、職員の工夫により、今後も外出支援を継続されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族よりお金を預かり事業所で管理している。しかし外出での食事とか買い物自動販売機で購入等は、自分で払っていただけるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や親戚等からの電話や手紙等を歓迎し、プライバシーに配慮しながら本人が話しやすい雰囲気づくりの支援し受話器を渡して安心した会話支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールには季節の花、壁には利用者と合同の手作り物、地域の人との交流写真等、又皆様の団らんの場より料理の匂い、音、生活感のあふれた支援をしている。	リビングのソファでは入居者同士が語らい、台所や共有空間の一体的な作りは、料理の音や匂いが食思意欲を引き出し、壁面を利用した写真や書及び作品の掲示、相性や身体機能に応じた配慮したテーブル配置等職員は工夫しながら生活空間を充実させている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂や居間は一体的な作りであるがソファやダイニングテーブル、丸テーブル、椅子の配置を考え、絵や花飾り等で居心地よい空間づくりをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご利用者は安らぎを得るような馴染みの物、古い物、が環境づくりに欠かせないことを家族に相談し本人が居心地よく過ごせる工夫の支援をしている。	ベッドや鏡台・衣装ケースなど持ち込まれ、畳を入れ布団敷きの居室もあり、家族の協力で本人が居心地良く過ごせるよう工夫されている。掲示用ボードには写真や家族からの手紙・塗り絵の作品などが飾られ、代表からのプレゼントの誕生日カードも大事に貼られている。ホーム内は掃き出し窓で庭にフラットな造りとなっており、災害時の避難口としても利用でき開放的な居室である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能、残存能力を活かして生活できるよう全てバリアフリー、手すり付き掃き出し窓、浴槽内も安心安全に入浴できるよう補助の福祉用具等を設置し自立した生活支援をしている。		